

フラグメンツ第7回

1 茶毒蛾^{ちあどくが}に刺された (『身辺記』)

①山里のアトリエは、医療過疎地にある。ここでは病気になった時、初期対応の巧拙が、その後の回復に大きく影響する。どの病院にかかるかの判断ミスは、時には致命傷になる。

ある夏の日の夕方、突然、両腕、胸、背中一面に数十個の発疹がでた。思い当たる原因はない。翌日にはさらに赤みが増した。さすがに「これはまずい」と思ったが、近くにはよい内科も皮膚科もない。

②別荘地に定住している知り合いに聞いてみた。定住族は、都会から移住してきた人で、^{いっかげん}一家言を持っている人が多い。医者への評価も厳しい。

Aさんに、評判のよい内科か皮膚科を知らないかと聞いた。
症状を説明すると、Aさんは「この季節なら虫に刺されたんだろう。皮膚科がいいんじゃないか」という。そういえば、2日前、夏椿の苗木を買いに、小高い丘の上にある庭木の展示場に行った。そこは広大な林である。しかし、長袖を着ていたし、刺された覚えは全くない。

③遠くにある「大学病院はどうか」と聞くと、厳しい答えが返ってきた。
大学病院はぜんぜんダメ。頭の良し悪しや出身大学よりも、経験がものをいう。
あそこは医者が外からローテーションでやってくるだけ。虫刺さされを扱った経験は少ないから、見当違いの薬を出される。それより、地場のN医院がいい。

④定住族のBさんに聞いても同じような答え。
東京に通って治療するのもありだが、東京の皮膚科はここら辺の虫については全く知らない。見当違いの治療をする。N先生なら地元の出身だからよく知っている。

⑤もう一人、知り合いの村人に聞いてみたら、やはりN医院がいいという。
3人とも一致してN医院を勧めた。ただ「よいお医者さんだが、高齢なので今やっているかどうか分からない」という皆の話である。

⑥車で 40 分ほど。やっと N 医院を探し当てた。待つこと 20 分。診察室に呼ばれた。大部屋に 10 個ほどもの机と椅子が並んでいる。「個室ではないのか…」と多少不安になる。

看護師や平服のスタッフ女性があちこち行き交っている。ゆっくりと診察してくれる雰囲気ではない。

やがてスタッフの中年女性が来て、症状を聞く。「どうやら虫に刺されたらしくて、数日前から両腕と胸に数十カ所発疹ができ、それが続いている」。わたしは訴える。

⑦彼女は、わたしの発疹を見もせず、20 枚ほどの発疹の写真の一覧を示して「どれに似ている？」と聞く。「これによく似ているような気がする」と指さすと、彼女は「ああ、茶毒蛾ね」と 1 人で納得している。

⑧そうこうするうち、(後期高齢者のわたしがいうのも気が引けるが) 80 代後半くらいのご老人(失礼を深謝!)がやって来て、ふとわたしのそばで立ち止まる。無言である。腰は曲がり、小柄で、足元がおぼつかない。だが、白衣である。

「この女性は一体何者？ もしかしてお医者さん？」 大きな不安が沸き上がる。

⑨わたしが腕をまくって発疹を見せると、チラッと一瞥。

彼女はスタッフの掲げる写真一覧の一枚を指差し、「それ」と言う。「いつもの薬ですね」とスタッフが確認する。この間わずか 3 秒!!

終わると、彼女はスタスタと行ってしまった。胸や背中の中発疹を見るわけでもない。

スタッフの女性が「やはり茶毒蛾です。塗り薬を出しますから 10 日ほどつけてください。特製のぬり薬です」との御宣託。

⑩やはり、老女は医者だったらしいが、挨拶をする暇もない。 狐につままれたような、しかし、なんだか割り切れない思いで帰宅した。

だが、塗り始めて数日すると発疹は徐々に減少。10 日すると完治。とにかく治ればそれでよい。評判通りの名医かも・・・。

だが、本当にあの診断(?)でいいのか？ あれじゃだめじゃん。 次回は他を探さなければ。やれやれ。

2 幸福の木が枯れた

①昔の話である。

幸福の木が枯れはじめた。はじめて家を新築した時、お祝いにもらった大きな植木鉢である。十数年たって、幸福の木は1メートル半ほどに育ったが、葉と幹だけが大きくなり、花はつかなかった。

家族はみなあきらめていたが、二年前に突然白い可憐な花が咲いた。「これはよいことが起きる兆しだ」と、家族中で喜んだものだった。その木が枯れはじめた。

②たまたま知り合いの三人に、どうすればよいかと聞いてみた。

隣のご老人は「水をやりすぎだろう」という。水は注意しながらやっているはずである。たまたま垣根の刈込みにきてくれたシニアに聞くと「肥料が足りないのだろう」という。なるほど前回アンプルの肥料をやったのは、確か数ヶ月前だった。

「そうかもしれない」と思いながらも、念のため行きつけの花屋さんに聞いてみた。

「日光に当てすぎではないか」との答えである。そういわれれば、窓越しの夏の日光は厳しかったかもしれない。

③世間話に過ぎなかったが、見事に三者三様である。水やりを少なくするか、肥料をやるか、暗めのところに置くか、どうすればよいのだろう？

原因は一つだけでなく、いくつかの原因が重なっているかもしれない。ひょっとしたらみんな間違っていて、原因は他にあるかもしれない。

④結局、みな意見を全て実行したが、木は枯れてしまった……。誰も「分からない」とはいわなかった。誰を信じればよかったのか。素人のわたしは途方に暮れる。幸せの青い鳥を逃した気分になった。

善意か悪意かとは関係なく、対策が間違っていれば害はわたしに及ぶ。害を避けるためには、他人の意見を丸呑みしない方がよい。

⑤だが、自分の知識や考え方には明らかな限界がある。だから、他人の意見を聞くことは大切である。無知に陥らないためにも、少なくとも3人の違う意見を聞くことが肝心だろう。

そのうえで、自分でも手間暇かけて、確実な対策を調べる。身近な人の意見は、その

ための一里塚に過ぎない。そう悟った。

3 陽気にボートを漕ごう (『この世は夢か幻か (1)』)

① Row, row, row your boat は、アメリカの古い童歌^{わらべうた} (英語では baby song)。ボートを漕いで川を下る、楽しげな歌である。古くから日本でも膾炙^{かいしや}されているので、知っている人も多いだろう。1850 年代の作ともいわれるが、その起源も作者もはっきりしない。

②だが、ありきたりの童歌と思っていると、最後にどんでん返しのドッキリがある。突然、作者がギロリと顔を出す。

末尾の Life is but a dream (所詮、人生は夢なのだから) の部分である。幼児相手に、こんな人生観まで盛り込んでしまうのか! そこが面白いところだし、怖いところである。

③原文はわずか四行の短詩である。

Row, row, row your boat
Gently down the stream
Merrily, merrily, merrily, merrily
Life is but a dream

④以下は、わたしの仮訳である。

漕ごう、ボートを漕ごう
川下に向かってゆっくりと
陽気に、愉快地、愉快地、陽気に
ボートを漕ごう
所詮^{しょせん}、人生は夢なのだから

⑤最後の一節(Life is but a dream)をどう解するかによって、解釈が違ってくる。

訳語一つで歌全体のニュアンスが違ってくる。

鍵になる Life の訳語は「人生」「一生」「この世」「生きる事」など、さまざま考えられる。

また、ボートは人生を、川は時の流れを暗示する、とも考えられる（「your boat=your life」
「the stream=time」）。

そうなら、baby song とはいえ、全編が人生を暗喩した歌ということになる。思っていた以上に深い！

⑥この最後の一節を手がかりに、本稿ではばらくの間、Life is but a dream（人生は夢）を手掛かりに、先人の軌跡を探って行く予定である。

4 言葉は絵のようなものだ！（『この世は夢か幻か（2）』）

①ここで、一旦、話は脇道にそれる。

かつてフランシス・ベーコン（イギリスの哲学者・法学者・政治家。1561 年－1626 年）は、「言葉を愛するのは、絵を愛するようなものだ」「言葉は単に物事のイメージでしかないと見抜いた。言葉は絵のようなもので、背後には何もないのだ。

②言葉の本質は「イメージの惹起^{じきつき}」にすぎない。言葉で語ったからといって、現実となるわけではない。イメージは人によって違う。多様である。万華鏡で見る模様は瞬間瞬間で、全く違うように、イメージには実体がない。その本質は幻想か妄想である。

③イメージをリアルと受け取っては、われわれの身を守る事はできない。言葉を愛してはならない。言葉の向こうには何もない。

だが、人は言葉のイメージに容易に騙される。酔ってしまう。だから、世の中にはフェイクニュースがあふれ、デマゴグがはびこる。

④ポジショントークとは、自分の立場に有利な発言をオブラートに包み、あたかも客観性を装って話すことをいう。和製英語である。

「自分の立場、立ち位置に由来して発言を行うこと。転じて、自分の立場を利用して自分に有利な状況になるように行う発言のことを指す」（ウィキペディア）。

セールストークとは違い、ポジショントークは自分の利益のために、客観性を装い言葉を操って、人を操作しようとする。その分たちが悪い。

⑤ポジショントークは、近年の政界/官界に激増している。ポジショントークを使う者ほど、

言葉を愛する。言葉で人々を操作できると思うからである。

例えば、首相が「安全安心な五輪/パラリンピックを実現する」といったところで、現実とは安全安心から程遠い。リアルの世界を無視して、ヴァーチャルのイメージを語っても、言葉はむなしく虚空に散るだけ。なぜか？ それは首相の言葉が、イメージだけのポジショントークだからである。

⑥ただ、気をつけなければならないのは、イメージは繰り返され尾ひれがついて、たやすく「物語」に変異すること。「物語」は、論理ではなく、情動に基づく産物だからイメージと近い。世の中に「物語」が浸透すると、それは一定の力を持ち始め、現実を動かす力を持つ。それが恐ろしい。

トランプ元大統領が作り出した、イメージと物語はこうして成長した。そして、社会の分断をあおった。

5 これはりんごではない (『この世は夢か幻か (3)』)

①ルネ・マグリット (ベルギーの画家。1898年－1967年) は、言葉のイメージと意味を深く掘り下げた画家だった。

子供たちが小さいころ、家族でマグリットの展覧会を見に行ったことがある。

彼の作品に「これはりんごではない」という、ひとひねりしたタイトルの絵があった。

「リンゴ」がまるで植物図鑑のように、写実的に描かれていた。

(写真はアートペディア/近現代美術の百科事典<https://www.artpedia.asia/this-is-not-an-apple/> による)。



しかし、タイトルに意味が分からない。小学生の息子は「リンゴじゃないんだから、これは^{あんず}杏じゃない？」と分かったようなことをいい、中学生の娘は「普通のリンゴの葉っぱとは違うから、リンゴじゃないんだ」と意味不明の感想をもら

す。

②作品の意図を解しかねたが、解説を聞いて納得した。

わたしが実際に見ているのは、カンヴァスに描かれた丸形の曲線と葉っぱ模様と色彩の組み合わせにすぎない。それを「リンゴ」と即断するのは、人の解釈にすぎない。

この絵のイメージするものを、右と呼ぼうが、陶器と呼ぼうが、本来は自由なはず。言葉は符牒にすぎないのだから。

リンゴの絵と本物のリンゴとは何の関連もない！

③ところが、絵を見た途端、われわれは考える余裕もなく、甘い「リンゴ」と即断する。

マグリットは、絵画の与えるイメージ (=リンゴ) は、人の創り出した錯覚であると示唆している。彼は、このような人の「認知のゆがみ」を摘出した。

言葉は現実の認識を助け、現実の代替物として機能する。われわれは「言葉=実物」と錯覚しがちだが、言葉はあくまで代替物であって、実物そのものではない。絵画もそれに似ている。

④彼の思索は筋金入りである。もう一つ「これはパイプではない」と付記した絵がある。

写真のタイトルは「イメージの裏切り」だが、絵の下部には「これはパイプではない」との一文が入っている。どう見てもパイプだが、彼は絵自体パイプではなく、パイプのイメージを描いているといいたかったらしい。



(写真はアートペディア/近現代美術の百科事典。

<https://www.artpedia.asia/magritte-the-treachery-of-images/> による)。

⑤ヒトが言葉を獲得したのは、10万年-20万年前といわれる。言葉を知る以前、ヒトには茫漠とした「イメージの世界」しか知らなかったろう。すべては曖昧模糊として、存在は明確な意味を持たなかった。

言葉の本質は、対象そのものではなく、対象のイメージを表象するにすぎない。マグリットは

その様なイメージの世界を、垣間見たのだろうか。

⑥ マグリットは、およそ画家らしくなく、物静かなごく普通の人だった。スキャンダルや奇行とは無縁の常識人だった。絵を描くときも銀行員のようにワイシャツにネクタイを締めていた。他の画家とは違って、彼は美術界とは無縁だった。他人の絵にあまり興味を示さず、美術館へも行かなかった。アトリエも持たず、妻とドビッシーの『海』をよく聞いていた。

⑦ 富や権力や名誉を求めず、一介の市井の民として好きな絵の創作に打ち込んだ。彼は存命中に世の中に認められ、穏やかな晩年を過ごした。その生活は平凡だったが、その作品は非凡だった。マグリットは、かつて自ら語った様に、まさに画家であって画家ではなかった。

⑧ 以上みた、「陽気にボートを漕ごう」とベーコンとマグリットの話が、今後どう展開するかは、分からない。何が現実で、何が仮想なのか、究極のところは誰にも分からない。なぜなら、人間はそもそも幻想の中に生きているから。わたしにもまだ本稿のゴールは手探りである。(続く)